

5 畜 産

項 目	作 業 内 容
<p>(1) 豚、鶏の家畜伝染病防疫対策</p>	<p>(今月の作業・管理のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○豚、鶏の家畜伝染病防疫対策</li> <li>○乳用牛の管理</li> </ul> <p>ア 豚</p> <p>豚熱 (CSF) は、一昨年 11 月に県内養豚場において四国初となる発生が確認された後も、野生イノシシでの感染確認も続いており、引き続き農場における侵入リスクへの備えが必要である。</p> <p>現在、国内で発生している豚熱は特徴的な症状がみられず、感染が気づかない場合が多いため、発熱、食欲不振、元気消失のほか、うずくまり、便秘に続く下痢、呼吸障害等を発見した時は、まず豚熱を疑い、家畜保健衛生所へ通報する。発生予防の対策は、飼養衛生管理基準に基づき以下が重要なポイントになる。定期的に確認し、改善を行う。</p> <p>(ア) 人・物・車両によるウイルスの持ち込みの禁止</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・衛生管理区域、豚舎への出入りの際の洗浄、消毒の徹底と石灰帯の設置徹底 (図 1)</li> <li>・衛生管理区域専用の衣服、靴の設置と使用の徹底</li> <li>・人、モノの出入りの記録</li> </ul> <p>(イ) 野生動物対策</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・豚舎、飼料保管場所等へのねずみ等の野生動物の侵入、排泄物の混入防止</li> <li>・豚舎周囲の清掃、整理整頓</li> <li>・死亡家畜の適切な保管</li> </ul> <p>イ 鶏</p> <p>今シーズンは、隣県香川県をはじめ全国 13 道県 18 事例の高病原性鳥インフルエンザの発生が確認されている。ウイルスを持ち込む主な原因である渡り鳥には 5 月中旬頃までは注意が必要であり、ウイルスの鶏舎内への侵入は、野鳥や野生動物によるものと考えられており、野生動物侵入防止と人・車両の出入り対策を継続する。</p>

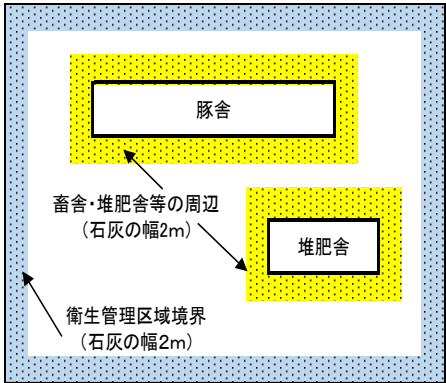


図 1 消石灰の散布方法  
(畜舎や衛生管理区域境界等に 2m の幅で消石灰を散布する)

項 目	作 業 内 容
<p>(2) 乳用牛の管理</p>	<p>発生予防対策は、豚と同様に飼養衛生管理基準に基づく対策が重要であり、鳥インフルエンザを疑う症状や死亡羽数が増加した時は、家畜保健衛生所へ通報する。</p> <p>(ア) 人・物・車両によるウイルスの持ち込みの禁止</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・衛生管理区域、鶏舎への出入りの際の洗浄、消毒の徹底と石灰帯の設置徹底</li> <li>・衛生管理区域専用の衣服、靴の設置と使用の徹底</li> <li>・人、モノの出入りの記録</li> </ul> <p>(イ) 野鳥等の侵入対策</p> <p>鶏舎や堆肥舎に設置する防鳥ネットは、網目が2 cm 以下のものを必ず使用し、設置する場合は、ゆったりと垂らすように設置すると野鳥が侵入しにくい (写真1)。</p> <div data-bbox="975 663 1385 920" data-label="Image"> </div> <p>写真1 堆肥舎に設置した防鳥ネット(野鳥や野生動物の住処となるため設置が必要)</p>
	<p>この時期は、夜間の気温が15℃程度まで低下するが、晴れた日中は気温が20℃を大きく超えることがある。暑さに弱い乳用牛の中でも搾乳牛は、この時期には暑熱ストレスを感じ始める気象条件となるため、早めの対策が必要となる。</p> <p>図2に示すように、乳量30~35 kg/日の搾乳牛では、日平均体感温度21~22℃から飼料摂取量が低下し始める。また、乳量は飼料摂取量の低下から2日後に減少することが観察される。</p> <div data-bbox="858 1249 1377 1585" data-label="Figure"> </div> <p>図2 体感温度と飼料摂取量(乾物)の関係</p> <p>牛の体感温度は、乾球温度×0.35 + 湿球温度×0.65 で算出される。気温24℃、相対湿度65%のとき、体感温度は21℃となる。</p> <p>このため、牛舎の側壁・カーテン等を取り除いて、通風を確保するとともに、直射日光が牛に長時間あたらないよう注意する。また、送風機の点検等を行い、気温が23~24℃になるようであれば、送風機を運転する。</p>